

ネットワーク社会での情報の共有とは

橋本信彦

日本大学大学院総合社会情報研究科

About sharing of the information of network society

HASHIMOTO Nobuhiko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Network society is what society to become. The society is considered to be the following forms. For example, sharing of the information which is one of the important requirements for network society opens us wide from the one-sided distribution from power, and frees informational selection. Each people who did new power in its hands should fully do the knowledge as the so-called social common sense, and consideration about an ethics view as correspondence to the society.

はじめに

デジタル社会の速度は、その数ヶ月前に近未来と考えられていた現象をも、既に取り組み始めているほど加速がついている。ネットワーク社会【1】と称されて多くの期待をその中に持ち、現実社会からの逃避までも含んだ近未来構想が、その筆頭であろう。多くの期待される像を内包するこの新しい社会は、如何なる形を整えつつあるのだろうか。

その萌芽は既に形をあらわしているようだ。たとえばネットワーク社会の重要な要件の一つである情報の共有は、権力からの一方的なその配分から我々を開放し、情報の選択を自由にしつつある。また情報の発信についても、巨大な設備を整えた、ある意味でその位置を権力の側としていたメディアにも匹敵する処理を、広範で迅速におこなえるようになってきている【2】。

どのような権力でも、その持つ力を作用させる場合、能力以前の問題として、その力を正しく使うための、つまり社会的存在としての人間の間での共存の規範・原理や正義感が必要であることはいうまでもない。権力はその正義さえも創りだせるからだ。新しい力を手中にした個々の人々は、その社会への対応として、いわゆる社会的常識としての素養や、倫理観についての考察を十分にす

べきである。そのことがいまほど必要とされている時期はないと思われる。

当然、多くの関係論文にも、来るネットワーク社会への期待と不安、さらには少々時期早々と考えられる論までも含め、ネットワーク社会におけるフレームワークの提唱に類する論稿【3】がここにきて見られる。

情報化社会という単語が使われ始めてから今日までのこの期間は、それほど短期間とはいえないだろう。その時の流れは、情報化社会という概念で括られた社会への、未来展望と期待の熟成には充分であったに違いない。展望や期待は、情報基盤の整備が進むなか、それはネットワーク社会と名前を変え、いままさに前述の例を含めて徐々にその姿を、全体像を、整いつつある。

近年の、社会的インフラとしてのブロードバンドの普及が、ネットワークを通じて、我々に情報の共有という新しい力を与えてくれる。情報が、一部の権力者のもとに集中している社会から、すべてではないが、その多くが個人にも得ることができる環境が、整いつつある【4】。与えられた力の価値がどのようなものか、それはどのように活用できるのか、それが単に、経済活動としての利益の追求だけに終わらせない為にはどうしたらよいのか。それらの間に答えられる準備が、我々個人の側に求められる。なぜなら、行政から与えら

れる情報に満足することは、単一方向からの一方的な情報の供給を受けるということにより、その意味や価値が限定されるからである。

個人や地域や国家の持つ過去の経験も、もちろん情報の一つと考えられる、しかしその情報の多くが、同じパラダイムの中でしか有用でないとしたら、ネットワーク社会においては、より多くの創造的な思考が必要とされることはいうまでもない。さらにはそれらの独創的な思考が活用できる社会の許容も、その範囲を広げる必要があるだろう。ここでとくに重要なことは、思考の方向である。思考のベクトルはその集中によってさらに大きな効果を期待できる。分散された、統一されない未来社会への期待や関連議論は、いくら積み重ねても無意味であるといえよう。

では、その方向といかなるものか。ごく端的に表現するとしたら、それはわれわれ人類が世代を超え、生活の中で得とくし、伝承し続けてきた知識を、自由なネットワーク社会で共有できるようにする。そのためのフレームワークを創ることである。ここでは情報の共有に際して、その方向性の規定と自由な思考が、如何にしたら妥協と融合が可能か、そして期待される社会への貢献につなげることができるか、そのことについて考察したい。

情報への意識の持ちかた

つい最近まで情報は、社会に不均等に分布していた。したがって国民各層がもつ情報の精度も多様にならざるをえなかった。このように情報の偏在は、社会全体に非効率と不平等感を生じさせてきた。もちろん識者のあいだでは、情報の交換と共有は当然のこと望まれているし過去にも望まれていた。しかしながら得られる情報も、あるいは調査し得ることも、費用や時間や地位、そして労力を厭わずかけることができる環境がそこには前提として必要であった。

ネットワーク社会に移行しつつある現在は、労力はべつとしても、前述のその他の環境はそれほど問題ではない。基礎的なインターネットリテラ

シーは必要不可欠だが、それは決定的な情報の非取得要因とはいえない。そこに存在する最も重要な問題は「情報共有」の正しい解釈ではなかるうか。

共有するということは一方的ではありえない。すくなくとも平等に意見を論じ合い、より良い社会環境を目標とする人々のコミュニティであれば、相互の互助精神と平等意識がその基本にあることは当然と考えられる。であれば、情報の共有とは、受けることだけでなく、発信することにもある。つまり受発信の双方にあることを理解しなければならない。

たとえば我々は、社会全体の情報化進展が自己に利益を生じさせることを望んでいる。しかし、コンピューターリテラシーの習得によって、情報共有の環境が用意されたとしても、国民相互の情報交換が活性化されるとは限らない。情報システムが提供されているにもかかわらず、それを活用しない個人には、情報の発信と受信の両方を行うことができるにもかかわらず、発信を行わずに受信のみを行う者が多いのだ。偏った情報利用ではあるがこれが情報化社会の現実である。

ではなにが問題なのであろうか。確かに情報の受信によって、多くの利益が得られることを我々は知っている、つまりそのことの動機づけを行う必要がないのである。それに対して、情報の発信によって、その行為が自己に利益を与えるか否かは実感として直接得られることはすぐにはない。それどころか得られること自体にも懐疑的にならざるを得ないほど社会は複雑にそのシステムを構成している。とうぜん情報の発信量が相対的に少なくなり、結果として、活発な情報交換は行われなくなる。

なぜ我々は、情報発信によって利益が得られるかどうかについて確信がもてないのであろうか。あまり優れた例えではないが、ひとつには他との比較における優位性が要点といえるだろう。

個人に直接的で有益な情報は、公開しないほうが合理的だという利己的な感覚が大きな障害となる。つまり、自分と他者との間には常に競争があり、競争に勝ち抜くには、たとえ情報の公開が、

他者やその一員であるコミュニティや地域、さらには国家社会全体にとって有益であるとしても、これを独占し、情報優位に立つことが自己にとって得策と考えるてしまうのである【5】。

このように、社会的に合理的なことが、必ずしも個人的には合理的ではないという状況が現実の社会を覆い尽くしている。つまりこの問題については本来深く根本的な社会に対する取り組みとして、さらに個人間や地域社会のとのかかわりも含めての対応策が必要という考えを示している。ここでは情報には受信と発信の双方が、つねに意識の中にその必要性を自覚することの重要性を指摘するに止める。

情報の受発信

情報を受信することや発信することは、有意義な情報の一方的な発信もあれば、もちろんある一つの課題にむかってする、建設的な議論の場をネットワークのうえに空間的に創設することもある。そこでは参画するものすべてがインテレクチュアルズとして、つまり専門的知識を有するいわゆる知識層と呼ばれる人々として、公共の場で発言をする視点が必要となろう。ではインテレクチュアルなるものの本質はどのようなものであろうか。

ハーバーマス(J. Habermas)によれば、『近代 未完のプロジェクト』岩波近代文庫三島憲一「編約」の序文で「インテレクチュアルは、現代の著述家や科学者のプロ意識を持つと同時に、可謬主義的な意識を抱いているし、同時に、デモクラシーの中の国家公民が持つ平等思考を備えている。

たしかに、自覚したインテレクチュアルズならば、よりよき立論が持つ力を信頼しており、その際に、迫力ある言葉を、また専門知識人としての知識に由来するよい評判を利用するかもしれない。しかし彼がよくわかっているのは、デモクラシーにおける決定過程においては、彼の発言は、他のどんな市民の発言以上の重みを持つものではない、という、このことである。いかなる組織力の後ろ盾もなく、またいかなる弾圧手段や、買収とか誘

惑といった方法も用いないインテレクチュアルズは、マスメディアによって支配管理された公共圏のなかでいわば素手で立っている数少ない役者の一人なのである」と説明している。

もちろんリベラルな公共圏【6】の存在がその前提にあることは避けようがない。としても、市井の民と同列に、知識層と呼ばれる人々の発言の重みを規定できることは、その内容の重さとは別に必要なことであろう。そこに初めて発信者の戸惑いを払拭させる要因を見出せるのである。学者とか政治家とかという立場を乗り越えて議論を可能にすることが、知的な大人の対話であり、マナーでもある。

重要なのは、インテレクチュアルズであるかどうかである。職業が何であれ、時には政策について議論し、時には経済を考え、時には町内会の防災講習で講義をする。意思を持ち思考する人々が国を、地域を、そしてコミュニティを成熟したものに導いていくのではなかろうか。

一度創り上げられたネットワークは、市民社会における、インテレクチュアルズや同等の意識を持つことに目覚めた人々によって、その網を広げていく、ネットワークの持つ単位は可変で規定は不要である。それらは時間的に地理的に自由でもある。ネットワーク社会での情報はこのような基盤上であって初めてその意味を持つことができる。

情報に色をつけることはできない、情報に優劣も無い、もちろん情報に地位などはあるわけがない。この情報概念の理解があれば、国家行政がその寡頭意識を払拭できないで行う改革にも、わずかなであるが希望と期待の細い道が残されることになるだろう。繰り返しになるが、自由な発言の場として、その前提を確固としたネットワーク社会における情報の受発信こそが、公共の議論の場として認められるべきである。そしてそこにおける立論こそが社会を変化させ、問題を解決すべく意識をつくりあげることができるのである。

情報の利用

ネットワーク社会をよりよく生きる手段として、

情報は必要不可欠になる。社会の基本が、受動的だけではその生活を維持できない環境に変化していくからだ。もちろん弱者の救済は別である。繰り返すが、ネットワーク社会においては、基本的なコンピューターリテラシーは当然のこと必要であり、取得できていなければならない。

いうまでもないが、情報の取得をもって、そのことがただ単に「情報社会を生きる力」を持つと認識することは、本来の意味を正しく捉えているとはいえないだろう。本質を見失っていると言っても過言ではない。単に情報を取得する必要性のみを、ことさらに強調することも間違いでもある。また、情報を得るために、単に情報処理機械として、自らの技能を向上させることだけをその目的として、そのことのみを強引に押し進めるものであってもならない。コンピューターリテラシーによる情報の取得とはあくまでも手段なのである【7】。

複雑なネットワーク環境の中においては、情報を、自らの生きていく意味を自覚できる種として理解しなければ、正しい情報の利用とはいえず、ネットワーク社会において意欲を持って生きていくことにはなりえない。また前述のように、本質的には社会がその構成を、地域的な囲われたコミュニティに限定せず、空間的な、ある意味で時間さえも超越した環境にそれを定義することも必要になるだろう【8】。

近代において情報は一方的なものであった。またそれは極めて政治的なものであった。簡潔に説明しよう、例えばラジオの出現はどうであろうか、ラジオはもちろんその圧倒的な能力ゆえ体制側に独占され、そしてその能力を一方的な権力を押し付ける道具として使用された。ではラジオの基本的な能力とはどのようなものか、それはけっして受信だけのものではない。受信機でもあるがほんの少しの改造で送信機にもなるのだ。ラジオの能力を認識し、世論形成の目的で利用したナチスドイツなどは、ことのよし悪しは別としてその目的の達成に関しては大きな成果をあげたといえる。もちろん、その力を大衆に与えることなどは夢にも考えなかったに違いない。

近年においても世界の趨勢は、メディアの体制側利用にその目的の多くを限定している。情報は限定され、選択され、ある意味で許可されたものだけが我々に届けられた。自由主義国家を標榜する国々においても、メディアが政府の規制に置かれているという点ではさほどの変わりはないだろう【9】。

独占している権力が一般大衆の手に渡ることを恐れたのだ。社会がそれだけ未成熟だったともいえる。

現在、パーソナルコンピューターから、ネットワークを通じて全世界に流れる情報を、そしてその自由な動きを考えると、この自由でフレキシブルな環境を、大いに享受すべきであり、如何なる規制の動きにも本質を見極め、対処する覚悟を持つ必要があるだろう。

さて、我々は許された情報の取得をどのように摂取できるのだろうか、情報は外見の事物のみで判断できない。「事物の持つ情動的側面とは、本来は固定されたものではない。梅という事物から、ホモ・サピエンスは視覚情報を切り出すが、犬は嗅覚情報を切り出す。情動的側面を切り出すのは、感覚器官と脳神経をそなえた"身体"であり、その切り出し方は、身体のありようによって千変万化するのである」と、情報の受取り方の方向、つまり情報を受ける身体能力の同一性が、ネットワーク社会と呼ぶ公共圏には必要であることを『IT革命』岩波新書P134で、西垣は説明する。

つとめてその位置を空間に置くネットワーク社会のスペースは、リアルスペースでは容易に確認できる情報の側面、つまり、向かい合って顔と顔を合わせた状況での相手の顔の表情や手足の動き、さらには言葉の抑揚などを確認することはできない。

そこには統一され規定された何らかのフォームが必要になるだろう。誤解のないように付け加えるが、ここでいう規定とは、情報を受取る側が持つ利便的な任意規定である。そしてその利便の中には、異なった文化で生活する人々が共同に持ちえるグローバルな統一性を含む。

広場としてのネットワーク社会

地球規模で行なわれている情報の流通は、一部の独裁国家を無視さえすれば、そこではグローバルな国境を越えた市民のつながりが実現をしている。それぞれのパソコンが国境の検問を越え相互に繋がれているのだ。それは地球規模にこの惑星がまとまり、さらに多くの知が、一つのアーカイブとしてその機能を持つことをも実現しつつある。個々の情報は網の上をコンピューターに繋がれて縦横に飛び交い利用されている。広大なコミュニティ広場の出現である。

我々の日常の行動を考えてみたい、時系列で毎日の予定表をたて、分刻みでその予定を障害なく整然と進めていく人が、どれほどの割合で存在するだろう。皆無と表現するのは難しいかもしれないが、どう見回しても私の周りにはいない。

しかしシステムの論理性は、情報を処理することに力を発揮する。効率を高め行動を速め、無駄な回路を遮断することで迂遠することの危険さえ取り除き、さらには計画の正確さと行動の選択を助ける。けれども我々人間は日々計画どおりに、物事を迅速に高速に、そして24時間休みなく働くことは不可能である。

休憩をし、仲間と趣味の話題に熱中し、無駄な作業をあえてすることもある。しかしながら機械システムはどうだろう、仲間はいない。趣味も無い。簡易ベッドで休憩することも無いのだ。

上記のことは、人間が機械のように仕事をできないことと、機械（コンピューター）が、無意味に思考することができない【10】ことを端的にあらわしている。我々は無意味に、不統一に、利己的に、思考する。けれども時系列予定表の存在は、常に思考を中断させ拘束する。

社会生活ではあらゆる予定表が存在し、その行動を規定する。ではネットワーク広場には予定表があるのだろうか。

結論から申し述べる、ネットワーク広場には予定表は不要なのだ、ネットワーク広場では我々は自由に空間を移動する。任意の時間に発言をし、議論を提起する【11】。それらは雑談であり、悪

口であり、勧誘や仲間内のおしゃべりでもある。

広場の中のネットワークコミュニティは種類雑多、規定はこれも不要である。そこでの住民は一定の目標に向かって参加する意思を持てばよい。参加に際して規制をするコミュニティがあってもよし、自由に参加できるが発言を強制するコミュニティがあってもよい。自由な参加討論の場がネットワーク広場なのである。ネットワーク社会とは、そのグローバルな環境を持って、自由な討論を促進する、雑多なコミュニティ広場の集まりを容認できる社会環境と考える。

ネットワークによる部分世界観の統一

「人々は昔から自分や他人の幸福の為に様々な努力を重ねてきた。しかしその努力の成果輝く文明開化となった今日でも、個人にもあるいは国家にも不安と不幸の絶え間はない。それどころか、近時の世界各地での紛争は次第に深刻に又複雑になりさらに大規模化している。

このままでは人類は自らの努力によって自滅の方法を發明し破局への進行速度をあげていることになってしまう。現実に我々は、世界破滅の、その日までの進行状態が簡単に試算される段階へと到達している。」4半世紀も前の橋本【12】のこの主張は、警鐘とはなりえず、経済の繁栄の前に埋没されようとさえしている。

ではなぜ我々の努力が、その期待とは逆に人類の破滅へとその歩みの方向を変化させたのだろうか。その原因は実に簡明なのである。それは誰でも知ることができる。人類史を紐解いてみても、あるいは自らの身近を省みても。それは一口に言えば個人や団体の意見や主張（事物観～世界観）の相違と、それによる排他相克の結果である。

この場合の個人や団体（地域・生活域・文化域等の諸団体）の事物観や世界観は、その人や団体に関係の深い事物群を中心とする。つまり所属する国家の宗教観、あるいは地域の風習、さまざまである。これは物心一切の事物群からなる全世界、統一世界観に対し、部分世界観ということが出来よう。そこで人類は部分観の群立相克によって不

安不幸の状態にあることになるわけである【13】。

では部分世界観の群立、そして相克の原因はどこにあるのであろう。この問題はそれほど簡明ではない。ただしその一つに情報の孤立があることは間違いない。

論理的に考えれば、それこそ物心一切の事物群からなるこの地球を、いや宇宙を、その実相の解明に科学が勝利すれば、その情報の伝達によって世界観の統一は簡単に成されるだろう。なぜならば部分世界観の存立が、つまり例えば、部分世界観の一つである宗教を例にとると、この世を我が神が創り上げたと主張するそれぞれの神が、宇宙の実相の解明によって否定されるからである。

人類の目標はなんであろうか、ネットワーク社会における幸福という視点からも、ネットワーク社会の協調的発展という視点からも、共通の世界観を持ち、平和で楽しい社会を創ることは、少なくともその目標の一つであるはずだ。「共通の世界観を持つ」この目標をネットワーク社会の目標に据え、多くの参加を、多くの知恵を集めるべきである。

おわりに

ここで提案する統一の世界観への目標とは、多元主義【14】を否定するものではない。思想、信条、信教の自由を妨げるものでもない。アメリカ主義やグローバリゼーション【15】を推し進めようとしているのではない。逆にネットワーク社会は、多元主義や多様性を守る要因をその自由さに含んでいる。

それは過大なまでに膨らみ、いま以上の分裂を世界に及ぼす危険すらある。アナーキーな分裂のみが横行するネットワークが予想されるとしたら、それははどどこかで予防する必要がある。それには統一された理想の世界観を持つことで、人類の高次な理想を希求すべく方向性を定めることが必要と考える。

その理想を基礎に、異文化の環境から発信されるさまざまな情報を知ることをネットワーク社会の基準にするべきである。ここで重要なことは異

文化の知にたいして寛容でなければならないということである。

ネットワークはそれ自体が新しい文化である。新しいコミュニティでもある。既存の概念での判断は未来展望を阻却する。理想に向かい極力柔軟に思考を展開すべきである。

20世紀はマスメディアが文明文化の展開を主導したといえる。これからの21世紀は多様な文化展開が人々によってなされていくだろう。情報の集中的な配信から分散型の配信に変化し、ネットワーク社会の住民もそのことをあたり前に受け入れていく。ネットワークの混乱や分裂も当然予想される。それがあたりまえだとも言える。

ただしネットワークでの情報の利用が人工に膾炙すれば、理想に向かった変化は加速されるだろう。情報の共有は世界観の統一を助ける。この論稿での期待はこのことに尽きる。

注

- 1) あらゆる情報機器がインターネットなどのネットワークで結ばれ、場所や時間を問わず情報を自由自在にやりとりできる社会「ユビキタス・ネットワーク社会」とも表現される。「ユビキタス」とは同時に至るところに存在するという意味・ラテン語
- 2) 参考文献『日本型情報化社会』p61-98
- 3) 竹田信男 「インターネットにおける信頼」第9回情報文化学会予稿集
- 4) 参考文献『思想としてのパソコン』p11-14
- 5) 参考文献『情報格差の要因と対策』
- 6) 参考文献『メディアと公共圏のポリティクス』p197
- 7) 参考文献『「IT革命を」を考える』p175-184
- 8) 参考文献『思想としてのパソコン』p281-284
- 9) 参考文献『文化としてのIT革命』p87
- 10) 参考文献『思想としてのパソコン』p41-46

- 11) 参考文献『文化としてのIT革命』p135
12) 橋本元三郎 早稲田大学電気工学科卒
(1930年)

研究調査

通信省 (多重通話ケーブル・真空管特性・n次
方程式似解他)

内閣技術職員 (官民研究体制計画・物質計画・
OR研究)

会社団体 (国内道路網計画・水
問題・海運問題・地域開発計画等役員、委員とし
て参加)

- 13) 参考文献『U系世界観(草案)』p3

14) ここで述べる多元主義とは、地球規模で
の社会のなかに、複数の異なる人種・民族・集団
のもつ言語や文化を言う。

15) 冷戦終結後、市場経済が世界的に拡大し、
生産の国際化が進み、資金や人や資源や技術など
生産要素が国境を越えて移動し、貿易も大きく伸
び、各国経済の開放体制と世界経済への統合化が
進む現象。(現代用語の基礎知識)

参考文献

- 1 花田達朗 『メディアと公共圏のポリティ
クス』東京大学出版会 1999年11月
2 西垣 通 『聖なるヴァーチャルリアリテ
ィ』情報システム社会編 岩波書店1995年1
2月
3 J.ハーバーマス 三島憲一「編訳」『近代
未完のプロジェクト』岩波現代文庫 2000年
1月
4 西垣 通 「編著訳」『思想としてのパソコ
ン』NTT出版 1997年5月
5 落合洋文 『情報社会に関する人類学的考
察;異文化共存の意義と条件』情報文化学会誌 第
7巻 第2号
6 宮尾尊弘 『日本型情報化社会』 ちくま
新書 2002年2月
7 長田好弘 『「IT革命を」を考える』 新
日本新書 2001年5月

- 8 吉見俊哉 『メディア時代の文化社会学』
新曜社 1994年12月

9 橋本信彦 『情報格差の要因と対策』修士
論文 2002年3月

10 山崎正和・西垣通編 『文化としてのIT革
命』晶文社 2000年10月

11 橋本元三郎『U系世界観(草案)』廣済堂印
刷 1976年4月